

ひろしま県民いきもの調査 ～いきものログ講習会～ 「海の生きもの観察会」報告

2025年8月21日（木）13:00～16:00



講師：福山大学生命工学部海洋生物科学科
金子 健司 教授（水産資源生態学研究室）
阪本 憲司 教授（水族生態遺伝学研究室）
協力：アクアリウム科学研究室
主催：広島県環境県民局 自然環境課

令和7年（2025年）8月21日、瀬戸内海芸予諸島の因島にて「海の生きもの観察会」を行いました。会場は、福山大学内海生物資源研究所とその地先海岸です。研究所は、雄大な因島大橋のたもとにあり、その前の海は、アマモ場がある遠浅の美しい砂浜海岸で、学生の研究フィールドになっています。

当日は、福山市や東広島市などからご家族・ご友人のグループ5組、計14名にご参加いただきました。スケジュールは、“ひろしま県民いきもの調査”と“いきものログ”の説明、研究所内の“マリンバイオセンター水族館”見学、地先海岸での地引網体験、採れた生物の観察と盛りだくさんです。

講師は、福山大学、水産資源生態学研究室の金子健司教授と水族生態遺伝学研究室の阪本憲司教授にお願いしました。金子教授は魚類の生態や分類に詳しく、因島の海生生物の季節変動などを研究されています。阪本教授も瀬戸内海や陸水の生物に詳しく、里海、里山の保全研究をされています。



講師紹介（金子先生）



講師紹介（阪本先生）

観察会は、研究所内の研修室にて座学からスタートしました。全体スケジュールや講師の紹介、熱中症対策などのオリエンテーションののち、スタッフから“ひろしま県民いきもの調査”と“いきものログ”について、内容の説明やスマートフォンへの登録方法などの説明がありました。参加者の皆さんは、その場で各自のスマートフォン取り出し、登録方法の確認などを行っていました。



ひろしま県民いきもの調査



生きものログの説明

座学が終わり、水族館見学です。“マリンバイオセンター水族館”は水族館の運営や飼育技術を学ぶための本格的な施設で、大小の展示水槽が多数あり、瀬戸内を始めとした多くの魚介類がテーマごとに展示されています。

ここでは、アクアリウム科学研究室の学生、“ケイ”さん、“マイ”さん、“あっきー”さんに解説していただきました。



水族館へ移動



解説していただいたケイさん、マイさん、あっきーさん（左から）

はじめにマイさんの解説により、大水槽を見学しました。瀬戸内の大型魚類がたくさん泳いでいます。特徴的な種として、コブダイの生態について教えていただきました。水槽にはオス、メス2匹が入っています。名前に“タイ”が付きますが、タイの仲間ではなく、ベラの仲間だそうです。頭に大きなコブが発達しているのがオスですが、生まれたときは全てメスで、体の大きな個体がオスに性転換することでした。



大水槽見学



大水槽のコブダイ

次に、種類ごとに分けられた小水槽の見学です。ケイさんに、タツノオトシゴの仲間のクロウミウマについて解説していただきました。泳ぎが下手で、長く伸びた尾を海藻に巻き付けて流されないようにしている、体の色を変えて擬態する、オスのお腹に育児嚢があり、その中で卵がふ化するなど、大変興味深いお話をうかがいました。

続いて、潮の満ち引きを再現した潮汐水槽の説明をマイさんにいただきました。海の満ち引きは、月の引力によるもので、地球が月の正面に向いたときに潮が満ちるとのことで、皆さん熱心に聞き入っていました。



小水槽見学（クロウミウマの水槽）



潮汐水槽の見学

その後は、水族館内の扉を抜け、隣接するバックヤードの見学です。“マリンバイオセンター水族館”は一般公開されていますが、バックヤードは普段、見ることはできないので、参加者の皆さんは興味津々です。ここでは、あっきーさんに解説していただきました。バックヤードでは水族館の展示水槽で飼えない魚や実習で扱う魚を飼育しているとのことで、そのほかに餌の準備や新たにやってきた魚の寄生虫のチェックなども行っているとのことで、当日はシマイサキの幼魚が寄生虫の確認のために個別水槽に入れられていました。

以上で水族館での解説は終了、しばらく自由見学となりました。参加者の皆さんは、解説していただいた学生講師の方々に、熱心に質問されていました。



バックヤード見学



シマイサキ幼魚の蓄養水槽見学

一旦、休憩後、二つ目のプログラム、“地引網体験”です。研究所のすぐ北側の浜に皆さん移動してきました。

地引網は規模が大きく、ボートで沖合 100mまで引っ張っていき、大人数で協力して引き上げるスタイルです。まずは、金子先生と阪本先生の研究室の研究生により、1回目の引き上げが行われました。

続いて2回目です。今度は、参加者の皆さんも引き上げに参加しました。軍手を着用し、毒やトゲのある生物に注意しながら、研究生の皆さんと協力してロープを引っ張りました。



地引網会場の浜に向けて移動



地引網 1 回目（研究生による引き上げ）



地引網 2 回目（参加者も一緒に）



網に入った生きものの回収

地引網は先端が袋状になっており、捕らえた生きものが最後に袋部分に集まる仕組みです。生きものを袋から取り出して大きなバットに入れると、「イカ、かわいい!」、「小さなカワハギがいっぱい!」、「イカがすみ吐いた!」など、大きな歓声があがりました。

あまりに盛り上がったので、当初は2回の引き上げを予定していましたが、3回目を行うことになりました。再びボートが100m沖合まで網を引っ張っていき、投入。みんなでロープを引きます。今度は、大きなクラゲや違う種類のイカ、アカエイの幼魚など色々な魚介類が採れました。現地でしばし観察したあと、研修室に持ち帰って、詳しい観察に入りました。



地引網3回目



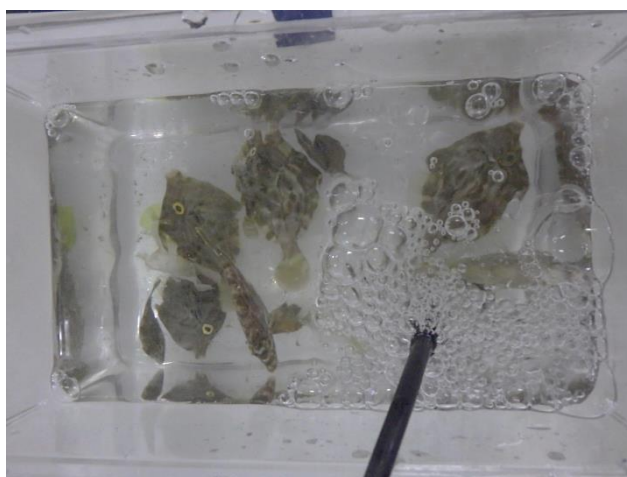
採れた生きものの観察

研修室では、金子先生と研究生に採れた生きものを選別していただきました。大まかな種類ごとに水槽に分けて入れ、みんなで観察。「この魚、きれい!かわいい!」、「天ぷらにしたら美味しそう!」など、色々な声があがりました。

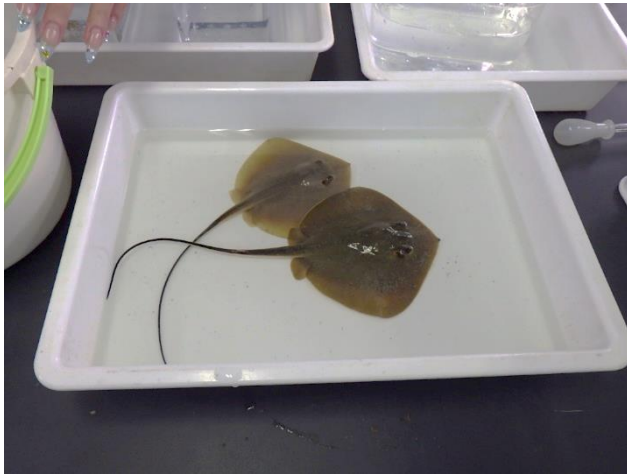
金子先生から、「例年6月~7月は幼魚が多くて種類が増えるが、その後、夏の間は種類が減ってしまう。しかし、今日は意外と多くの種類が採集できた」、「採れた生きものを皆さんで調べて種名を当ててください」とのお話があり、参加者の皆さんは、写真を撮影して体の特徴をよく観察し、スマートフォンで調べるなどして、ほぼ全ての種名を正解していました。



生きものを選別



カワハギ、アミメハギなど



アカエイ



コウイカの仲間



スズキ、クロダイ、カマスの仲間など



生きものの観察



生きものの観察



生きものの観察（顕微鏡）

その後、金子先生から、本日採れた生きものについての解説がありました。「トウゴロイワシはカタクチイワシに似ているが、浅いところに多い」、「メバルは3種類いて胸ビレの条数で種類が違う。今日採れたのはシロメバル」、「コショウダイの幼魚が1匹採れたが、稀である」、「顕微鏡で観察した非常に小さな生きものはカイアシ類の仲間で、魚に寄生していたと思われる。サヨリにはエラにサヨリヤドリムシがよく寄生しており、マダイは口の中にウオノエが寄生している」など、幅広くたくさんの解説をしていただきました。

続いて、クロダイの幼魚の食性に関する研究成果を解説していただきました。成長にあわせて餌と餌

場を変えていくことや、餌が豊富なアマモ場は特に重要な成育場所になっていることなどの説明があり、参加者の皆さんは熱心に聞き入っていました。

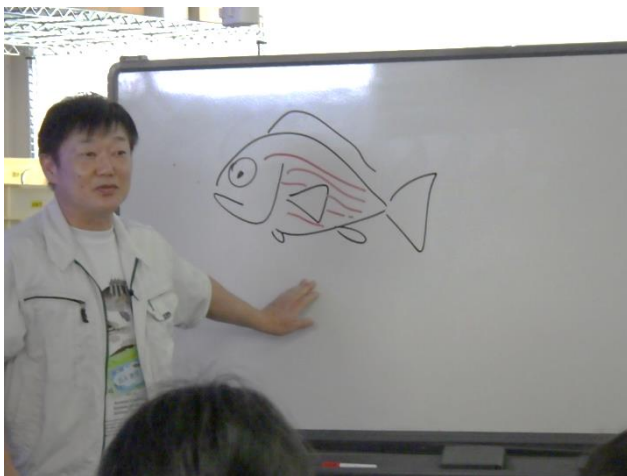


金子先生の解説



研究成果の解説

また、阪本先生からは、魚類の形態や繁殖生態についての面白いお話がありました。「魚は頭を上に見ることが基本なので、頭から尾にかけての縞模様は縦縞である」、「瀬戸内海でよく見るギザミ（キュウセン）は、大きい青ギザミがオス、小さい赤ギザミがメスだが、生まれたときは全部メスで、その中から大きな個体がオスに性転換する」、「ギンブナはメスしかいなくて、ドジョウやコイの精子で子供ができ、生まれた子供はクローンである」などです。



阪本先生の解説（魚の縦じま）



先生の解説に聞き入る様子

以上、福山大学内海生物資源研究所の全面的なご協力のもと、「海の生きもの観察会」は盛況のうちに閉会しました。地引網や水族館バックヤード見学、専門家による詳しい解説など、「普段できない体験ができて良かった」と参加者の皆さんからご感想をいただきました。体験を通じ、身近な海岸にすむ生きものの多様性について、良い学びの機会になったことと思います。